手術室における震災避難訓練

（金谷明浩、蘇生 35: 23-26、2016）

2016.9.09 災害医学抄読会　http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

【要旨】

東日本大震災後、病院危機管理の一つに震災対策が重要である。そのため、東北大学付属病院ではさまざまな職種の医療従事者たちを交え避難訓練を行った。効果が挙げられた点として、アクションカードを用いた初期対応および避難経路の確認さらに、震災の状況を考慮した医師間のスムーズな決定がある。これらの訓練は必要不可欠であり、継続して行うことが重要である。

【訓練方法】

年に 1 回手術室 2 室を用いる限定的な訓練開催で、事前に説明されたシナリオに沿っておこなった。極限の精神状態の中でも落ち着いて対応するために、麻酔科医用、外科医用、看護師用のアクションカードを作成し、麻酔科医用は麻酔器に、外科医用と看護師用は壁に貼り付け日ごろから確認できるようにしている。これにより、手術の及び患者の覚醒の判断、患者及びスタッフの安全確保、避難経路の確認及び避難を訓練した。

【結果】

〈アクションカード〉

アクションカードが初見である医師もいたのも関わらず、スムーズに避難できたことからその有用性が確認された。また、手術部の看護師は新人研修など日ごろからアクションカードに目を通すように指導されており、そのことが円滑に訓練を行えた一因と考えられる。

〈災害時の手術の継続、麻酔覚醒の基準〉

災害時の手術の継続、麻酔覚醒の基準についてはアクションカードに従い、担当麻酔科医と執刀医で協議したうえで決定し災害対策本部に報告した。手術の継続および覚醒の判断は医学上の問題だけでなく、マンパワーや建物の特性なども訓練時に考慮することが重要である。

〈手術部と病棟との連携及び患者搬送〉

病棟間との密な連絡、災害時の停電や医療用ガス供給の遮断に備えることも重要である。。

【まとめ】

今回の訓練に参加した人が、訓練内容を各部署にミーティングにおいて伝えることでその内容の多くをスタッフで共有するようにしており、また日勤帯の手術室の手洗い場において、前年の災害訓練内容ビデオを繰り返し流し続けることにより一定の成果が確認された。今後はさらに、初動対応などの小規模な机上訓練を施行し全職員に対するさらなる災害対策に対する知識を充実させていく必要がある。